

【フォーラム】

ウォライタ語の引用句を含む文の統語構造

若 狭 基 道

明星大学非常勤講師／跡見学園女子大学兼任講師／白鷗大学非常勤講師

【要旨】 エチオピア南西部で話されているウォライタ語（アフロアジア語族、オモ語派）の引用には、一貫した直接話法の他に、引用句末定形動詞（及びそれに照応する主語名詞句）が元の発話者の視点で、その他の部分が引用者の視点で引用される直接・間接混合話法が存在する。また、3人称の通常の代名詞と再帰代名詞の現れ方から判断して、ウォライタ語の引用句は全体としては節を構成していないと判断される*。

キーワード：ウォライタ語，引用，節，アイコン

1. はじめに

エチオピア南西部で話されているウォライタ語には、直接話法が一貫して用いられる引用とは別に、もう1つ異なったタイプの引用がある。本稿の目的は、主として後者の引用句、及びそれを含む文全体の文法論的・統語論的考察にとって重要と思われる現象を整理することである。

以下、第2節ではウォライタ語がどのような言語なのか概観する。第3節では引用句や話法に関し、一般言語学的に考察、定義する。第4節ではウォライタ語の引用句における1, 2人称の扱いを観察し、引用句末定形動詞とそれに照応する主語名詞句には直接話法が、その他の部分には間接話法が採用される話法があることを見る。第5節では、3人称の通常の代名詞と再帰代名詞がどちらも使える条件を考察し、直接・間接混合話法による引用句が節を構成していないことを、その条件を

*本稿は、日本アフリカ学会第44回学術大会（2007年5月26日、於長崎ブリックホール）、同第45回学術大会（2008年5月24日、於龍谷大学）、ことばのミステリー研究会（2008年7月12日、於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、Aflang研究会（2009年1月10日、於キャンパスポート大阪）で行った口頭発表を発展させたものである。湯川恭敏先生を始め、貴重なコメントを下された方々に御礼申し上げます。またお二人の『言語研究』匿名査読者からは草稿に対する建設的なコメントを数多く戴いた。特に視点の問題と語句の改変の有無が別問題であることを御指摘戴けたのは有難かった。この点は承知していたつもりであったが、初回投稿時には相当な混乱が見られ、査読後に結論が大きく変わったと言われても仕方ないくらいである。カテゴリー変更に伴う圧縮の関係ですべてを活かしきれなかったのは残念であるが、『言語研究』誌編集委員会からのも含め、数多くの御指摘の御蔭で本稿は格段に読み易いものになった。無論、本稿の不備に関する一切の責任は筆者にある。

本稿は、筆者が研究代表者である日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号1972093、平成19～22年度）、および京都大学の梶茂樹教授が研究代表者である同補助金（基盤研究（B）課題番号20320059、研究協力者として平成20、23年度参加）の成果の一部である。初期の現地調査を可能にして下さった財団法人三菱信託山室記念奨学財団（現財団法人三菱UFJ信託奨学財団）にも心より御礼申し上げます。

利用して論じる。第6節では、これらの現象が、引用句末の定形動詞のアイコン性（対象を写像ないし模倣した記号としての性格）の高さと関連している可能性に簡単に触れる。

2. ウォライタ語の概要

ウォライタ語は、エチオピア南西部の、首都アジスアベバから約400kmの道のりのソド（ウォライタ語で sooddo¹）を中心都市とするウォライタゾーンと呼ばれる行政単位で話されている言語である。

ウォライタ語はアフロアジア語族のオモ語派に属するとされている言語である。オモ語派は南北に大きく分けられるとの説に従えば、ウォライタ語は北オモに属し、その中でもオメト諸語を代表する言語である。母語話者人口は2007年の国勢調査によれば1,627,955人である。エチオピアの総人口は同じ国勢調査によると73,750,932人であるから、ウォライタ語母語話者がエチオピア総人口に占める割合は2%強にすぎない²。

形態面に関して言えば、大半の語は語彙的な意味を示す語幹と文法的な機能を示す語尾から構成されている。統語面に関しては典型的なOV言語であり、語順は日本語に似ている。同一節内の主語名詞句（その主要部は主格形で現れる）と述語動詞は人称・数・性に関して照応するのが原則である。ただし、主語名詞句は節の必須要素ではない。

本稿のデータは、主として筆者が1997年より13回の渡航、延べ約27ヶ月の滞

¹ 近年のウォライタではラテン文字を用いてウォライタ語を表記する試みがなされているので、本稿でもその表記を採用する。その際に、現地の学校で使われているウォライタ語の教科書の表記を参考にした。原則として音韻表記であり、各文字は概してIPAから推測される音価を有しているが、注意を要するのは以下である：c [tʃ], j [dʒ], q [k], x [tʰ], y [j], ch [tʃ], dh (喉頭化した [d]), nh [ɲ], ph [pʰ], sh [ʃ], zh [ʒ], ' [ʔ]。

現地の表記では、英語と同じく文や固有名詞は大文字で書き始めることになっているが、本稿では査読者の御意見を取り入れてすべて小文字で表記する。また、グロスを付ける関係上、ハイフンを適宜挿入し、形態素の境界を示した。

なお、本稿で使った略号は以下の通りである。

ABS (absolute, 絶対格。他の格が使われない所で使われる無標の格で、例えば動詞の直接目的語や肯定平叙名詞述語文の述語に使われる形である。いわゆる「能格 ergative」と対になる格ではない)、COM (comitative, 共格後置詞)、CVB (converb, 副動詞形。「～して」の意味)、DAT (dative, 与格後置詞)、DIST (distal, 遠称)、F (feminine, 女性)、INF (infinitive, 不定詞)、INTER (interrogative, 疑問形)、IPFV (imperfective, 未完了形)、LOC (locative, 場所格後置詞)、M (masculine, 男性)、NEG (negative, 否定)、NOM (nominative, 主格)、OBL (oblique, 斜格。後続する名詞句を修飾する際の格)、OPT (optative, 希求(命令)形)、PFV (perfective, 完了形)、PL (plural, 複数)、REFL (reflexive, 再帰代名詞)、REL (relative, 関係節形(連体形))、SG (singular, 単数)、SUBOR (subordination marker, 従属節標識)、1 (first person, 1人称)、2 (second person, 2人称)、3 (third person, 3人称)。

² エチオピアの中央統計局 (Central Statistics Agency of Ethiopia) のウェブサイト <http://www.csa.gov.et/> で2013年1月13日に閲覧した。当該数値はそれぞれホームページの「CENSUS 2007 TABLES」というタブをクリック、「Documents」の8番目の「Country level」をクリックして得られる資料の118ページ、および7ページにある。

在期間に断続的にアジスアベバとウォライタゾーン内の町ボディティ（ウォライタ語で bodditte）で行って来た現地調査に基づいている。本稿で扱うデータは多くがエリシテーションで得られたものである。以下ではテキストからの例文である場合には、その旨註記する。主たるインフォーマントとして協力して下さったのはエチオピア暦 1935 年（西暦 1942 年か 1943 年、生まれた月は本人も把握せず）生まれの Alemu Koyra Balla 氏と西暦 1961 年生まれの Asela Gujubo Gutulo 氏である。改めて感謝申し上げたい。

3. 引用とは

引用とは何か、の定義は難しい。藤田（2000:9）は「統語的な引用表現」を、「所与と見なされるコトバを再現しようとする形で示すもので、そのコトバのまとまりが、そのようなものとして、文の構成要素として機能しているもの」と規定しているが、本稿でもこの考え方に従う。そして、文中のこの規定に対応する部分を「引用句」と呼び、文中にそのような引用句を存在させる言語行為を「引用」と呼ぶ。

もちろん、引用と言っても一様ではない。例えば、元の発話者の視点を活かし、元の発話者の立場に立ちつつ、場所、人称、モダリティの表現をした引用がある。いわゆる直接話法である。例えば元の発話を忠実に再現することを意図した場合等に見られ、場合によっては口調まで真似た場合も考えられよう。

ただし、ここで問題となっているのはあくまでも視点である。多少の語句の改変があったとしても元の発話者の視点を取っているという意味で直接話法と認定できる場合がある。藤田（2000:159）から日本語の例を挙げよう。

- (1) 橋本「オイ、米谷、電気消してくれ」
 鷺原〈米谷に〉「橋本が『ライト消せ』と言ってるぞ」（傍線は省略）

上の例では、「鷺原」の発言に含まれる引用句「ライト消せ」では、元の発話の「電気」が「ライト」になっている等の改変があるが、元の発話者（＝橋本）の視点を活かした命令表現であることには変わりなく、直接話法と言える。場合によっては元の発話自体が常識的な意味で存在していない場合すら考えられる。鎌田（2000:60）から日本語の例を挙げよう。

- (2) （自宅食卓でみかんを食べる修さんのそばでよだれを垂らしている愛犬ジェフリーを見て、修さんの妻が）
 修さん、ジェフリーが僕にもみかんちょうだいよってゆうてるわよ。

上では「ジェフリー」は犬であるから文字通り「僕にもみかんちょうだいよ」と日本語で発言したとは到底思えないが、「ジェフリー」を指すための「僕」という語の使用等から判断して「ジェフリー」の視点が採用されており、直接話法である。「所与と見なされるコトバを再現しようとする」際に、その「所与と見なされるコトバ」は実際に誰かの口から発せられたものでなくとも構わないのである。鎌田（2000:

60–61) は引用句創造説を提唱しているが、確かに (2) のような表現は「けっして特殊な例というのではなく、むしろ、極めて日常的に観察される引用表現である」(鎌田 2000: 60) と言えよう³。

一方、引用者の視点を反映した引用も考えられる。いわゆる間接話法である。鎌田 (2000: 108) の例を使って説明すると、

- (3) a. 昨日松島君は僕に「明日君のうちへ行くよ」と言った。
(引用符は本稿筆者が補った)
b. 昨日松島君は僕に今日僕のうちへ来ると言った。
(下線は原文にあるものとは別に本稿筆者が施した)

(3a) の引用符で示された部分は元の発話者である「松島君」の視点を活かした直接話法による引用句であるが、(3b) の下線部は引用者の視点が取られており、「明日」が「今日」に、「君」が「僕」に、「行く」が「来る」にそれぞれ置き換えられた、間接話法による引用句である。

さて、ウォライタ語にも直接話法による引用がある。例えば、ウォライタ語で出版された聖書のマルコによる福音書 10:21 から例を挙げる (表記は改めた)。

- (4) yesuus-i ... “ne-yyo iss-i-b-ay
イエス-NOM.M 貴方.OBL-DAT 一-OBL-物-NOM.SG.M
pacc-ees; b-aada ne-yyo
欠ける-IPFV.3SG.M 行く-CVB.2SG 貴方.OBL-DAT
de'-iya-b-aa ubba-aa bayzz-ada,
在る-REL.IPFV-物-ABS.SG.M 全部-ABS.SG.M 売る-CVB.2SG
he miishsh-aa hiyyees-a-wu
DIST.OBL お金-ABS.SG.M 貧しい-OBL.SG.M-DAT
imm-a; ... yaat-ada y-aada
与える-OPT.2SG そうする-CVB.2SG 来る-CVB.2SG
tana kaall-a” yaag-iis.
私.ABS 従う-OPT.2SG そう言う-PFV.3SG.M

「イエスは……『あなたに欠けているものが一つある。行って、あなたの持っているものをすべて売って、そのお金を貧しい人に与えなさい。……そのようにしてから来て、私に従いなさい』と言われた。」(西暦 2002 年, The Bible Society of Ethiopia により “Geeshsha Maxaafaa” との題で出版されたラテン文字によるウォライタ語聖書の新約聖書部分の 56 ページより)

上のイエスの言葉を引用した部分は、イエスが tana 「私に」と 1 人称で言及されて

³ このように考えると、引用を論じる際に「元の発話」という表現を使うのは不適切である、少なくとも不適切な場合がある、と思われるが、分かり易く便利な表現なので、以下でも適宜使用することにする。

いたり、イエスの言葉の聞き手が ne-yyo 「貴方に」と 2 人称代名詞で言及されたりするところ等から判断してイエスの視点で述べられたものであり、直接話法が用いられていることは明らかである。

Adams (1983: 79) は引用の分析に際し Quote tagmeme なるものを設定し、それを「語られた言葉そのものから成る」⁴としている。よってウォライタ語における引用は一貫して直接話法であるべき、と考えているらしい。だが、ウォライタ語の引用にはもう 1 つある。それは間接話法によるものではなく、また Adams (1983: 280-281) が非常に不思議がり、説明に困っていたものである。この、直接話法でも間接話法でもない話法があることを次節で詳しく述べる。

4. 引用における 1, 2 人称

本節では、ウォライタ語の一貫した直接話法ではない引用における 1, 2 人称の振る舞いを観察し、それがどのような話法であるのか明らかにする。そのような話法はウォライタ語では決して稀ではない。

結論から言えば、そのような話法は、述語として用いられる定形動詞、及び（存在するならば）それと照応する主語名詞句には直接話法の視点が、その他の部分には間接話法の視点が採用されたものである。これを「直接・間接混合話法」と名付ける。例えば以下である（直接話法が関係する部分に下線を引く）。

- (5) a. nena-a-ra oott-ikke.
 貴方.OBL-COM 働く-NEG.IPFV.1SG
 (元の発話)「私は君とは働かない。」
- b. tanaa-ra oott-ikke g-iis.
 私.OBL-COM 働く-NEG.IPFV.1SG 言う-PFV.3SG.M
 (元の発話の聞き手が元の発話で表されていない第三者に対して)「彼は、『私は君とは働かない』と言った。」⁵

(5b) の最初の語が 1 人称で現れる理由は、述語として用いられる定形動詞でもそれと照応する主語名詞句でもないこの部分には間接話法の視点が用いられているからである。元の発話では聞き手であり、従って (5a) では 2 人称で表現されていた人物は、(5b) では引用者、つまり引用句を含む発話全文の発話者であるため、1 人称で表現されるのである。だが、元の発話の述語定形動詞 oott-ikke 「私は働かない」には引用に際し直接話法の視点が採用され、結果として (5b) でも元の発話と

⁴ Adams (1983: 79) 自身による Quote tagmeme の説明は以下の通りである：The Quote tagmeme which characterizes the quotation clause, must always be present in a quotation clause, must always directly precede the quotation Predicator, and comprises the exact words spoken.

⁵ この文の日本語訳としては、「彼は、私とは働かないと言った」もある。ここでは助詞「と」の前の代名詞に間接話法の視点が採用され、元の発話の「君と」が「私と」になっている。だが、余計な混乱を避けるため、また (5a) を元の発話とした引用を含む文であることを明らかにするため、敢えて完全な直接話法を用いた訳にした。以下、同じである。

同じ形が使われている。このように、直接話法の視点と間接話法の視点が共に用いられている (5b) の引用句 (元の発話に対応した部分) は、文字通りに日本語に訳すと「私とは私は働かない」という、いささか奇妙なものとなる。

主語名詞句をも含む類例を1つ挙げよう。

- (6) a. intte ta qaal-aa
 貴方達.NOM 私.OBL 言葉-ABS.SG.M
amman-ekketa.
 信じる-NEG.IPFV.2PL
 (クサの発した元の発話)「貴方達は私の言葉を信じない。」
- b. kuuss-i ba qaal-aa
 (人名)-NOM.M REFL.OBL.3SG 言葉-ABS.SG.M
intte amman-ekketa yaag-iis.
 貴方達.NOM 信じる-NEG.IPFV.2PL そう言う-PFV.3SG.M
 (元の発話を言われた人が第三者に)「クサは、『私の言葉を貴方達は信じない』と言った。」(引用句は文字通りには「自分(=クサ)の言葉を貴方達は信じない」)

実は、ウォライタ語の引用には、一見完全に間接話法のみが用いられているかに見える場合がある。例えば元の発話の述語動詞 (及びあるならばそれと照応する主語) が元の発話の参与者 (=話し手と聞き手) 以外を指しており、かつ引用の現場でもその引用を含む発話の参与者 (=引用者とその聞き手) 以外を指している場合である。この場合は直接・間接のどちらの話法を使おうとも結局3人称述語 (及び主語名詞句) で表されることになる。従って、述語動詞とそれに照応する主語名詞句以外に間接話法が用いられている場合、引用句において一貫して間接話法が用いられていると考えても矛盾が生じないのである。

- (7) a. tana m-ees.
 私.ABS 食べる-IPFV.3SG.M
 (元の発話)「彼は私を食べる。」
- b. nena m-ees yaag-ada
 貴方.ABS 食べる-IPFV.3SG.M そう言う-CVB.2SG
 woxx-ay?
 走る-INTER.IPFV.2SG
 (元の発話に出て来ない人が元の発話者に対して)「君は『彼は私を食べる』と言って(怖く思って逃げるために)走っているのか?」(Adams (1983: 280) より。表記・グロスを改めた⁶)

⁶ Adams (1983: 280) は明示されていない引用句の主語を「イタリア人達 Italians」であるとし、逐語訳でも they を用いている。おそらくこの例文を含んでいたテキストの文脈を考慮しての

だが、このように一見一貫して間接話法が用いられているかに見える引用も、述語動詞に1, 2人称が関与する(5)や(6)の例と並行的に考えて、直接・間接混合話法が用いられていると考える方が整合的であると思われる。

さらには、例えば3人称だけが関与し指示表現が出て来ないため、一貫して直接話法が用いられていると考えるのも矛盾が生じない以下のような例であっても、直接話法が用いられているのは述語定形動詞とそれに照応する主語名詞句だけであって、引用句の残りの部分では間接話法が採用されている、と考えるのが少なからぬ場合に当たっているのではないかと思われる。

- (8) meh-iyā do'-ay m-eesi
 家畜-ABS.SG.M 野生動物 -NOM.SG.M 食べる-IPFV.3SG.M
 g-iidi hirgg-iis.
 言う-CVB.3SG.M 心配する -PFV.3SG.M
 『家畜を野生動物が食べる(かも知れない)』、と彼は心配した。』

(7b)は一見一貫した間接話法が採用されているかに見える例として挙げたが、Adams(1983:280-281)はこの例に関し、真の直接話法であれば予想できない文として非常に不思議がっている。つまり、(7b)が真の直接話法の文であり、意味が上に書いた通りであるならば、最初の nena「君を」が説明できない、と言うのである⁷。だが、説明に困るのは、(7b)が真の直接話法を採用していると考えからである。本稿の上で述べたように直接・間接混合話法が使われていると考えれば何も不思議なことはない。

同一の引用の内部に直接話法と間接話法が混じって現れる現象は日本語にも存在する。鎌田(2000)が「準間接引用」と呼ぶものである。鎌田(2000:130)にある例から1つ以下に示す。括弧内は鎌田による視点の分析と話法の別である。

- (9) 君は山田君に、私(=伝達者、間接)が帰りがっている(=元話者「君」、直接)と言ったそうだね。

よって、少なくとも日本語を母語とする筆者にとっては話法の混合自体は特に不思議でもない。だが、ウオライタ語の場合、例文は挙げないが元の発話者の視点と引用者の視点が一文中に交互に現れたりして随分と複雑なことにもなりかねない。その複雑さは、結局は述語定形動詞に間接話法が適用されないことに由来する。すべてを引用者の視点で整理して間接話法で語ること自体は非常に納得の行く

ことであろうが、元の発話の最後(=引用句末)の動詞 m-ees という形自体は単数形であるので、本稿では上記のように訳した。また、(7a)自体は Adams(1983)は挙げていない。

⁷ Adams(1983:280)の(7)に関する説明は以下の通りである: If the above [=本稿の(7b)] were true direct quote, and the boy [=明示されていないが(7b)の主語であり(7a)の発話者] said that they [複数形の使用に関しては註6参照] were about to eat him, he would have to refer to himself as "me" in the quote "they will be eating me". However, "me" is not used, but rather /nena/ "you (abs[olutive])" ...

ことであるし、実際ウォライタ語の引用でも間接話法の視点は大いに活用されているのに、不思議である。Adams (1983) が驚くべきも、この点であったと思われる。

5. 引用句における3人称

本節では、ウォライタ語の3人称代名詞の使用条件を利用して、引用句末の定形動詞が節を構成する力を有していないことを論じる。

ウォライタ語の3人称代名詞には通常の代名詞と再帰代名詞(仮にこう名付ける)の2系列がある。本節で問題にしたいのは通常の代名詞と再帰代名詞の使い分けである。Adams (1983: 269) によると、再帰代名詞は同じ節の主動詞の主語を指す時に、通常の代名詞は同じ節の主動詞の主語以外を指す場合に使われる⁸。彼の挙げている例文は以下の通りである(表記・グロスを改めた)。

- (10) baass-i ba keett-aa b-iis.
 (人名)-NOM.M REFL.OBL.3SG 家-ABS.SG.M 行く-PFV.3SG.M
 「バサは自分 (=バサ) の家に行った。」

- (11) baass-i a keett-aa b-iis.
 (人名)-NOM.M 彼.OBL 家-ABS.SG.M 行く-PFV.3SG.M
 「バサは彼 (=バサ以外) の家に行った。」

多くの場合、これで説明できるのは事実である。だが実際にはどちらの代名詞も使える場合がある。その条件は、原則として以下のようにまとめられる。

- (12) 下位節の3人称代名詞が上位節の主語と同じ対象を指し、かつ両節の主語が異なっている場合、下位節においては、通常の代名詞(非再帰的)と再帰代名詞のどちらも使われ得る

具体的には次のような場合である。

- (13) kuuss-i as-a ubb-ay
 (人名)-NOM.M 人々-OBL 皆-NOM.SG.M
bana / a maadd-i-n galat-iis.
 REFL.ABS.3SG / 彼.ABS 助ける-SUBOR-LOC 感謝する-PFV.3SG.M
 「クサは人々皆が自分/彼 (=クサ) を助けてくれた時、感謝した。」
 (ただし通常の代名詞 a を使った場合には「クサは人々皆が彼 (=クサ以外) を助けてくれた時、感謝した。」の意味も可能。)

⁸ Adams (1983) は筆者が人称代名詞と呼ぶものを細かく分類している。厳密に言えばここで紹介した彼の議論は本稿で言う斜格形(OBL)のみに関するものである。/ba/ (再帰代名詞「自分の」) と /?a/ (通常の代名詞「彼の」) に関する彼の説明の原文(英語)は以下の通りである: … the form /ba/ “his” refers to the subject of the main verb of the clause in which /ba/ occurs, and excludes any other 3m referent … /?a/ “his” refers to someone other than the subject of the main verb of the clause in which /?a/ occurs …

ている場合には、その引用句内の従属節においては通常の代名詞も再帰代名詞も使用可能である。

- (17) baalot-a bana / o maadd-ida
 (人名)-NOM.F REFL.ABS.3SG / 彼女.ABS 助ける -REL.PFV
 as-atu-ssi miishsh-aa imm-a
 人々-OBL.PL-DAT お金 -ABS.SG.M 与える-OPT.2SG
 yaag-aasu.
 そう言う -PFV.3SG.F

「バロテは『私を助けてくれた人達にお金をあげなさい』と言った。」(引用句は文字通りには「自分／彼女を助けた人達にお金をあげなさい」)

本節のまとめとして、引用句を含まない複文 (13)、単文の引用句を含む (15)、複文の引用句を含む (17) の節構造をそれぞれ以下に図示する。節を [] で示した。また、語順がほぼ同じなので日本語訳で示す。引用句最後の定形動詞が複文の下位節を構成する従属節形とは認定されていないことに注意されたい。

- (18) [クサは[人々皆が自分／彼を助けた時], 感謝した] (13)
 [オンボシェは自分を君は助けてくれたと言った] (15)
 [バロテは[自分／彼女を助けた]人達にお金をあげなさいと言った] (17)

この分析には抵抗が感じられるかも知れないが、ウォライタ語の3人称代名詞の客観的な使用状況から判断する限り、このように考えるしかない。そして、Adams (1983) の Quote tagmeme を基にしたウォライタ語の quotation clause の分析は、少なからず観察される直接・間接混合話法を無視している点に加え、引用句を節と見なしている点でも受け入れられないことになる。

6. ウォライタ語引用句の統語的性格：アイコンとしての引用句

本節では、以上の現象が示唆するウォライタ語の直接・間接混合話法による引用句の統語的性格に関する見通しについて簡単に触れたい。それは「引用句末の定形動詞のアイコン性が高いために、引用句が節を成していないと見なせる可能性がある」というものである。

第4節と第5節で扱った現象はどちらも引用句末の定形動詞がポイントとなっていることから推測されるように、これら2つの現象は互いに関連していると思われる。端的に言えば、引用句末の定形動詞と呼んで来たものは、もはや普通の動詞ではなくなっている、ということである。であればこそ、引用の場に合わせて人称、数、性を決定・変更することもなければ、従属節を締め括る力（一般にウォライタ語の従属節の末尾は動詞である）も無いのである。

これに関しては、藤田 (2000: 39-85) が詳細に論じているように、引用句は通常のシンボルとしての言語記号とは異質なアイコンと見なし得る点が注目される。即

ち、引用句は対象である「所与と見なされるコトバ」を写像ないし模倣した記号と考えられる点である。換言すれば、「さっき食べてたの何？」という質問に対して通常の言葉で「リンゴだよ」と答えるのではなく、リンゴそのものを差し出して答に代えるような伝達行為に匹敵する表現であるという点である。

引用句の異質性をもっと明らかになるのは、藤田 (2000: 48) が論じているような、外国語や「日本語のきまりを逸脱した不適格な語列」が引用句として文の一構成要素となっている場合である。例えば以下のようなものである。

(19) ジョンは即座に That will do と言った。

上において英語の部分 That will do は適格な日本語の文 (19) の構成要素ではあっても、日本語の節として引用句以外の部分と同じ日本語の文法規則で分析するのは不可能である。

以上は主として直接話法に当てはまることであろうが、本稿で主として扱ったウォライタ語の直接・間接混合話法を用いた引用句末の動詞も、元の発話者の視点が採用されている分だけより忠実な再現が意図されており、従ってそれだけアイコン⁹としての色合いが濃く、通常の定形動詞とは異質なものになっている、というのが筆者の見通しである。さらにはエチオピアの他の諸言語でも同様の現象が存在するのではないかと推測しているが、現段階ではいずれも可能性の指摘にとどめておく。

参 照 文 献

- Adams, Bruce (1983) A tagmemic analysis of the Wolaitta language. Unpublished doctoral dissertation, The University of London.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』, 研究叢書 260. 大阪: 和泉書院.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』, 日本語研究叢書第 2 期第 2 巻. 東京: ひつじ書房.
- Wakasa, Motomichi (2008) A descriptive study of the modern Wolaytta language. Unpublished doctoral dissertation, The University of Tokyo. (http://www.world-lang.osaka-u.ac.jp/user/liccosec/africa/AF_Wakasa_DrDissertation.pdf で閲覧可能)

執筆者連絡先:

[受領日 2012 年 5 月 7 日

〒 176-0001 東京都練馬区練馬 3-13-2

最終原稿受理日 2013 年 1 月 14 日]

ヴェイラ・メイプル 2F

motomichiwakasa@nifty.com

⁹ ウォライタ語でもう 1 つアイコン的な性格を持つものに preverb と呼ばれるものがある。これは意味的に無色の補助動詞 (自動詞的に使われる場合、通常は「言う」を意味する動詞) と共に用いられる、オノマトペ的なものである。詳細は Wakasa (2008: 653-658) を参照されたい。ウォライタ語の引用句と preverb の間には文法上の類似点が見られるが、共にアイコンであることに由来していると思われる。

Abstract

Syntactic Structure of Wolaytta Sentences Involving Reported Speech

MOTOMICHI WAKASA

Part-time lecturer at Meisei University / Atomi University / Hakuoh University

Wolaytta (Afroasiatic family, Omotic branch) is spoken in the southwestern part of Ethiopia. In addition to genuine direct quotation, it allows direct–indirect mixed quotation in which a finite verb at the end of the quotation (and the nominative noun phrase that agrees with it, if any) is reported from the viewpoint of the speaker of the original utterance and the rest of the quotation from the viewpoint of the reporter. Judging from the distribution of normal and reflexive third-person pronouns, a quotation in Wolaytta does not constitute a clause by itself.